萬葉拾穗抄

八之下

秋田乃 穂田乎雁之鳴 尓 秋乃田の穂田を雁の鳴渡る可聞

穂田乎雁之鳴 渡 可聞 穂田乎雁之鳴 渡 可聞

夜之 穂打呂尓毛鳴 而 今朝乃 旦開 雁鳴寒 聞之奈倍

今朝乃 旦開 雁鳴寒 聞之奈倍

野邊能淺 茅曽 付 丹 来 野邊能淺茅曽付丹来

二首 大宰師大伴卿

吾 哥尓 榛牡鹿 来鳴 先 芽之 吾哥尓榛牡鹿来鳴先芽之

花 嬬 呵 尓 来 鳴 榛牡鹿 花嬬呵尓来鳴榛牡鹿

吾 哥之 秋芽 花 風乎 痛 吾哥之秋芽花風乎痛

可 落 成 将見 人 賞欲得 可落成将見人賞欲得

一首 三原王

秋 田乃 露者 重 家里水鳥乃 秋田の露は重し家里水鳥

青羽乃 山 能 色付 見者 青羽乃山能色付見者

七夕歌二首 湯原王

秋 風之 念 座 良武 従情 妹乎 秋風之念座良武従情妹乎

乗牛 之 念 座 良武 従情 妹乎

見 吾 苦 夜之 更降 寸 者 見吾苦夜之更降寸者

織 女之 袖 纒 三更之 五更 者 織女之袖纒三更之五更者

河 瀬之 鶴 音 不鳴 者 夜 河瀬之鶴音不鳴者夜

七夕歌一首 市原王

妹 許 登 吾 去道 乃 河 有 者 妹許登吾去道乃河有者

附 目 縄 結 跡 夜 更 乎 明 為 等 附目縄結跡夜更乎明為等

一云ふりくる雨 祇注秋日袖ふりくるといへる神をもふるもにかけまくもをよめるもいとふるめかし 景夫婦袖と神をかりてよめる心にて此歌の圓機のこゝろありてふりくるやとつゞきおもふ人のなどいへるまでいはゞなり 幸牛は牧くよりありにてたゞ人目つゝむとのみ注をいとゞしくよめるゆゑ人目つゝむとうちまねいへるまでなり 小田 くれいとゝゝ小田さやうの若小黄旋頭哥心仙日すゝき 上小には廿世紀ま仏ふくまでは同しうこと 黒あまのおほい鳥を小鳥といひ出たるなり

一首

藤原朝臣八束

榊 四香能 茅二 貫 置有 露之 白珠

さかきの乃萩かぬきへとくる露の白玉

相 依和仁 誰 人 可毛 手尓 将巻 知布

あきさめに誰乃人かもかくるんちふ

暁茅子歌一首

大伴坂上郎女

咲花毛 宇都呂 一云 平曽呂波厭

咲花もうつろ 一云なうろはいとふ

手有 長 意 尓 尚不如 家里

てある長き意にこそなほ家里

早く咲花もよくうつろふといふ意をなくて小をそへさく花此心もさよふ行ちくおもふ一云をうつろといふをうきこゝろにもとりなしつゝ咲花も亦きといふ意なれども人の心乃もきろよりうつろふといふ意にてこゝろ安いめ〳〵そこのうつろふ眼ゆくなどゝ

歌一首

至二衛門一大尉大伴宿禰稲公跡見庄作

典鋳正紀朝臣廣人

射目立而 跡見乃岡邊之 躑躅花

いめしてさ手のとり〳〵に折のこの花

總手折 吾 者将去 妹之 為 尓 標結 吾

みさこゐねりわれ行ゆきしめはりわれ

鳴鹿歌一首

湯原王

秋芽之 落乃 亂 尓 呼立而

秋萩の落乃乱に呼立而

鳴奈流鹿之 音 遥 者

なくなる鹿の音遥けき

一首

市原王

待時 而 落 鐘 礼 能 雨 令零收
とさまちつゝおつる志ぐれかなやとそ
開朝香 山 之 将二黄 變
あさとりのやまのうつろひめり
驫蟀歌一首 湯原王
暮 月 夜 心 毛 思努比の介 白 露 乃
ゆふづくよこころもしぬに白露の
置 此 庭 尓 蟋 蟀 鳴 毛
おくこのにはにきりぎりすなく
一首 衛門大尉大伴宿祢稲公
鐘 礼 能 雨 無 聞 零 者 三笠山
志ぐれのあめまもるくしもみつゝさす山
木 未 歴 色 附 尓 家 里
こすゑあまねくもみつまでよくも
和歌一首 大伴家持
皇 之 御 笠 乃 山 能 黄 葉
おほきみのみかさのやまのもみちを

今日之鐘 礼 尓 散 香 過 奈 牟
ふりしぐれかちりすぎなむ

一首 安貴王
秋 立 而 幾 日 毛 不 有 者 此 宿 流
秋たちていくひもあらねばこのやどる
朝 開 之 風 者 手 本 寒 久 吹 裳
あさけのかぜはたもとさむくふくも

一首 忌部首黒麻呂
秋 田 苅 借 菴 乃 毛 未 壊 者
秋田かるかりほのいほもいまだこわたねば
雁 鳴 寒 毛 霜 毛 置 奴 我 二
かりなきさむししもおきぬがに

故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首
明日香河 逝 廻 丹比真人國人
のすゑにもゆきめぐりてもとをちかへり 苦 之 秋 者 者

今日零雨余落香過奈年
ふるあめもちりすぎにけん

鶉鳴故郷之秋萩平
うづらなくさとのあれはぎをきてを
思人共相見都流可聞
おもふひとともあひみてるかも
秋萩者盛過平徒余
あきはぎはさかりすぎぬとたゞよ
頭刺不レ挿還去跡哉
かざしかねてかへりなんとや

跡見田庄作歌二首

大伴坂上郎女
妹秋萩之
月平始見
つきのはやしをみそめてより
此月其呂波落許須奈湯月
このつきころはちりこすなゆめ

雁歌一首 猪養山介伏鹿之
いかひやまにふすしかの
嬬呼音平聞之
つまよぶこゑをまくらうとしさ

巫部麻蘇娘子
誰聞都從此間渡雁鳴乃
たれかきつこゆなかわたるかりのなく
嬬呼音乃知守
つまよぶこゑのしるくもきこゆ

和歌一首 大伴家持
聞都哉登妹之問勢流雁鳴者
きゝつやと妹のとはせる雁なくは
真毛遠雲隠奈利
まことほくもくれなりにけり

一首 日置長枝娘子
秋甘者尾花我上介置露乃
あきかてはをはなかうへにおくつゆの
消削惜毛
けぬへくをしも

家持を猶心のよせて
山房を家持の人を誰りかり
まのうんを誰りかり乃
家特かりのいねかやを
老今一さも去と
まくつやと特りこと
遂く雪隠れ書呼
老もきりきり

秋つけ八おそう小
又妻去秋つけ八れとりの
家持をおりくほつくふこ
わりやとりひとも
娘よをさして
久りこりつかりも
我曰ありもとりと八
おとと呼ぬしきも
隠小房のうく

早田をとりふりて仲
秋の比乃房をよせり
もくれるくる
津四句ようく小序者
よけくこんをよ
いんとく

乃かこりて心ふ
句中かこりて心ふ
うくおかつなさも
もよ

句ぬれをきり
句隠して老ほ明ち小
とこィ雪かるひき
もしるひくをと回心
こと小乃かしやとや
春日山乃秋景之今

秋歌四首　大伴家持

雲隠　鳴　奈流雁乃　去而将居
雪かくれ　なくなる雁の　かてぬん
秋田之穂立　繁　之所念
秋田乃かりもち　さくくろふ
雨隠　情　鬱悒　出見者
ぬきこりみいて　これそ
春日　山者色付　二家里
かとり乃山をそ　うたさりくり
雨晴　而　清　照　有　此月夜
雨もれくもり　てせる　山月夜
又　更　雲　勿田菜引　都流
人さうに　さくくる

藤原朝臣八束

二首

此間　在　而　春日也　何処　雨障
こふ乃雨てかとりやつこあやさこり
出而　不行　者　戀　乍　曽　平流
こてゆのねこそこうとる
春日野介鶯　礼　零　所見　明日　従　者
かとり野よさくれる見ゆあすよ

應消　毛　吾者　所念　香開
けぬへくもわれいおりかいる

和歌一首　大伴家持

吾屋戸乃一　村　芽子乎　念　児介
わかやとのひとむらもさをおもふこり
不今見　殆　都類香開
見せくありてちるらし

黄葉頭刺牟高圓乃山
もみちばさ〳〵しぐれふるらし
吾屋戸乃草花上之白露乎
わくらばと乃尓置令消而
不令消玉尓貫物尓毛我
けさ〳〵もおくらのみもの

一首　大伴利上
秋之雨尓野治乍居者雖鶏鳴
秋乃芽子尓毛須礼多礼
吾妹之屋戸恋可念
わぎもこやどのはぎをおもふらむ

右大臣橘家宴歌七首

橘右大臣　諸兄公
奈流雁之雖遠
雲上尓鳴
雲乃上尓なきつるかりの
芽子乃下葉者黄変
はぎのしたばはもみちにけりも

従五位中務少輔　阿倍朝臣蟲麻呂
秋野之草花我末乎押靡而
秋のゝをばなをばおしなべて
来之久毛知久相流君可聞
こしくもしくあへるきみかも

今朝鳴而行之雁鳴寒
けさなきてゆきしかりがねさむし

長門守巨曽倍朝臣津嶋（コソヘ）（ツシマ）
宇加泥良比
此奈尓小牡鹿展起
ぬかひらにこのをしかふみおこし
可開可開為良久
あけむあけむすらく
故尓許曽
かもくれどこそ
君乎由利許之
きみをゆりこし

将相跡手廻
来津
君乎尓有鈴跡
きみにあらんと
雲上尓鳴
雲乃上尓なきつるかりの
芽子乃下葉者黄変
はぎのしたばはもみちにけりも

此野乃浅茅色付尓家敷
この野もあさぢもそつもきかりくる
文忌寸馬養(フミノイミキウマカヒ)

朝戸開而物念時尓白露乃
あさとあけてものおもふ時に白露の
置有秋芽子見喚鶏本名
おきたるあきはぎみよびとよむなもと
惇壮鹿之来立鳴野之秋芽子者
あさかのきたちなくのあきはぎは
露負而落去之物平
つゆおひておちてゆくものを
天平十年戊寅秋八月二十日橘
朝臣奈良麻呂(ナラマロ)結集宴歌十一首
橘朝臣奈良麻呂
不二手折一而落者惜常我念之
たをらずておちばをしとわがおもひし

心用乎荒尓痛勿念磨ゝ諸兄公乃男天平十三
こころをあらにいたくなおもひまろまろ諸兄公の男天平十三
年五月従五位下尓叙上
年五月従五位下に叙上
績日本紀ゝ
績日本紀ゝ
ももきねんんかんえんをん
百岐年乃過者雖有
ももきねのすぎばありともん
又逢云毛能尓有奈牟
またあはむともの
わくごとくもあらなん
我如此思恋
我如此思恋
秋萩乃咲有野辺乃
秋萩の咲有野辺の
朝露乃消易吾身
朝露の消易吾身
あさつゆのけやすきわがみ
猶頼母敷
猶頼母敷
なほたのもしく
頻尓思保之奈
頻尓思保之奈
しきりにおもほしなん
右件歌者世主有
右件歌者世主有
上件の歌は世主あり
故是以載之
故是以載之
ゆゑこれをもつてこれをしるす
凡厥宴席之歌
凡厥宴席之歌
凡そ厥の宴席の歌
多中々録尽
多中々録尽
多く中々に録尽
不堪繁文
不堪繁文
繁文に堪へず

秋芽子乃
秋萩乃
秋萩のえだもとをみだれてさけるしかのつまよぶこゑをきくときはかも
枝毛十尓乎見太礼而咲有鹿乃妻呼音乎聞時者可母
布勢王(フセノオホキミ)
布勢王
黄葉乎挿頭鶴鴨
黄葉平挿頭鶴鴨
もみちばをかざしつるかもかくしつつきみがためこそおいをもとめめ
如此而君尓恋牟
如此而君尓恋牟
長忌寸娘(ナガノイミキカミノイラツメ)
長忌寸娘
君尓恋吾者秋山
君尓恋吾者秋山
きみにこふわれはあきやまのもみちをまちてあきしかねつも
之黄葉乎不時見鶴鴨
之黄葉乎不時見鶴鴨
久米女王(クメノオホキミ)
久米女王
秋山尓黄葉平挿頭鶴鴨
秋山尓黄葉平挿頭鶴鴨
あきやまにもみちばをかざしつるかもかくしつつきみがためこそおいをもとめめ
如此而君尓恋牟
如此而君尓恋牟

平山乃峯之黄葉取者落
鐘礼能雨師無闇零良志

あをやまのみねのもみちをとりてこれいちる
かねのおとのあめしなくらし

縣大養宿禰持男

黄葉半落巻惜見手折来而
今夜神頭津何物可将念

きのふこそつゆかとおもへりしかんこよひしもふりてあかりけん

大伴宿禰書持

足引乃山之黄葉今夜毛加
浪去良武山河之瀬尓乃鳴

あしひきのやまのもみちはこよひのみ
うきてゆくらむやまかはのせに

三手代人名

平山乎今毛
黄葉手折来而

あをやまをけふもかもとりもみちをたをりきて

今夜神頭都落者雖レ落

こよひのかみつみやこにてちるとても

攀許遍麻呂

露霜介逢有黄葉乎手折来而
ほつゆにあへるもみちをたをりきて

妹都後者落十方

いもにみせまくのちはちるとも

大伴宿禰池主

十月鐘礼介相有黄葉乃
吹者持レ落風之随

かみなつきかねのおとにあへるもみちの
ふかばもちらせかぜのまにまに

内舎人大伴宿禰家持

黄葉乃過麻久惜美思共
遊今夜者不開毛有如香

もみちをのすぎまくおしみともにあそぶこよひは
あくるなかもあらぬかもあるごとく

竹田庄作歌二首 天平十一年己卯秋九月作之

大伴坂上郎女

悠 不有 五百代 小田乎 苅 亂

田廬奈 居者 京師 可念

田山 皆 黄葉 散乍 鴈 鳴 寒

隠口乃 始瀬 山者 色附 奴

鐘礼乃雨者 零 介 寒 思 毛

佛前唱歌一首 冬十月皇后宮之維摩講 終日 供養 大唐高麗等種々音樂乃唱 此歌詞 弾琴者市原王 忍坂王 後賜姓大原真人赤麻呂也 歌子者田口朝臣家守河邊朝臣東人置始連長谷等數十人也

皇后宮 光明子 淡海公乃第二女 聖武天皇乃妃 慶雲三年十月 供射不比等 淡海公 供維摩會 一七日始 初十至十六 蓋十六者大織冠譚 改 充 數日 元享釋書 云 初 山 之 乃 始 之 連綿 興福寺 也 大唐 高麗等 音樂 乃 事 此 乃 第二 段 乃 詞 書 乃 意 也

作者未詳

思具礼能 雨無間 作者未詳

三礼乃 雨 零 紅 尓

丹係蝦流 山之 落巻 惜毛

一首 大伴宿祢像見

秋芽子乃 枝毛十尾二 降露乃

消者 難消 色 出目八方

到娘子門作歌一首 大伴宿祢家持

1596 妹か家乃門田をみんと
心ざしいちミゝくか
あひく月明ゆゝは門
田とらしと妹か家
まわるさと門田り
よせてよめるなし

1597 あきのゝにさける
心明し秋といふ詞
とりかさねて一體
こせられたるなし

1598 さをしかのあさたち
あしふしてすめる

1599 時節乃氣色
言ふも秋かふ今小
ちりすぎにけり
鹿乃胸をわけ

1600 ゆく秋か萩乃
るをわか國乃河の
ゆきるゝやとそ
たゆるひはちらく

1601 心明し鹿鳴山邊ちりく
あくやまと和スト式点
かくやまへと和ス
美ハ同し
めたりちるまきか
るしなもいまる
ゆかさとし

1602 やまひこのあひとむ
鹿こゑ山ひことむ
をあひともにいふ

1603 鹿乃声山中小独
のこける秋情新なや

妹家之門田平見跡打出來之
いもかいへのかどたをみんとうちいでこし
情毛知久照月夜鴨
こゝろもしるくてるつきよかも

秋歌三首 天平十五年癸未秋八月詠物色

大伴宿祢家持

秋野介開流秋芽子秋風介
あきのゝにさけるあきはぎあきかぜに
靡流上介秋露置有
なびけるうへにあきのつゆおけり

棹牡鹿之朝立野邊乃秋芽子介
さをしかのあさたつのべのあきはぎに
玉跡見左右置有白露
たまとみるまでおけるしらつゆ

狹尾牡鹿乃胸別介可毛秋芽子乃
さをしかのむねわけにかもあきはぎの
散過鷄類盛可毛行流
ちりすぎにけるさかりかもいぬる

二首 内舍人石川朝臣廣成

妻戀介鹿鳴山邊之秋芽子者
つまごひにしかなくやまべのあきはぎは
露霜寒盛須疑由君
つゆしもさむみさかりすぎゆく

目頰布君之家有波奈須爲寸
めづらしききみがいへなるはなすゝき
穗出秋乃過良久惜母
ほにいづるあきのすぐらくをしも

鹿鳴歌二首 天平十五年癸未八月十六日作

大伴宿祢家持

山妣姑乃相響左右妻戀介
やまびこのあひとよむまでつまごひに
鹿鳴山邊介獨耳爲手
かなくやまべにひとりのみして

頃者之朝開介聞者足日木篦
このころのあさけにきけばあしひきの

山辛 舎鬱 狭尾壮鹿 鳴衾
やまをこえ さこそくるしく
傷惜寧樂故郷歌一首
大原真人今成
秋去者 吾耳之 黄葉見流
秋されば かもとりのやまも
寧樂乃京師 乃荒 惜毛
なら乃みやこの うつろふを
一首 大伴宿祢家持
高圓之 野邊乃秋芽子 日之
うつろへば のべのあきはぎ けのころの
曉露 尓開 兼 可用
あかつきつゆに さきにけらしな
秋相聞
思近江天皇作歌一首

もみちわたり
すみやかに うつろふかも
國中 有 者 人皆 乃
くにのうち あれば ひとみな の
わが蘰 乃 うつろふまでに
わが蘰の うつろふまでに
額田王
志賀乃朝 天智天皇
をとめども
をとめらが
額田王
君待 跡 吾戀 居 者 我屋戸乃
きみまつと わがこひをれば わがやどの
簾 動 秋之風 吹
すだれうごく あきの風ふく
鏡王女
風平谷 戀 者 乎 風平谷
かぜをだに こふるはともし かぜをだに
将来常思 待 者 何如 将一嘆
こんとおもへば まつものを いかにかなげん
御歌一首
秋芽子之 上 尓置 有 白露乃
あきはぎの うへにおきたる しらつゆの
消可毛思奈萬思 戀 管 不有者
けぬべくもしな こひつつあらずは
一首
丹比真人 闕名

宇陀乃野之秋芽子師旅鷄鳴鹿毛
うつろひの野の秋くさまさきあれ
妻介戀樂苦我者不堪
ほととぎすこゑのごとくきてはなき
贈太宰帥大伴卿歌一首
丹生女王
高圓之秋野上乃瞿麥之花
ふるさとの秋野のうへのなでしこの
下壯香見人之挿頭師瞿麥之花
うつろひぬかも
一首
笠縫女王
足日木乃山下響鳴鹿之
ひびきもしるくきこえつるかも
事之可毛吾情都未
ここだもわがこころなりけむ
一首
石川賀係女郎

宇陀乃野之秋芽子師旅鷄鳴鹿毛
うつろひの野の秋くさまさきあれ
妻介戀樂苦我者不堪
ほととぎすこゑのごとくきてはなき
贈太宰帥大伴卿歌一首
丹生女王
高圓之秋野上乃瞿麥之花
ふるさとの秋野のうへのなでしこの
下壯香見人之挿頭師瞿麥之花
うつろひぬかも
一首
笠縫女王
足日木乃山下響鳴鹿之
ひびきもしるくきこえつるかも
事之可毛吾情都未
ここだもわがこころなりけむ
一首
石川賀係女郎
序為之作歌数首并短歌
ますらをのこころをかたけなみ
逗留乃久尓月乃易徃
とどまりのひさにつきのかはりゆき
妻介戀苦我者不堪
つまにこひくるわれはたへかねつ
旋頭歌之体一首
宇陀乃野之秋芽子
うだのののあきはぎ
一首
鹿乃跡毛奈久
しかのごともなく
一首
賀茂女王長屋王之女也
秋野平且徃鹿乃跡師毛奈久
あきのへをつねゆくしかのごとしもなく
念之君介相有今夜香
おもひしきみにあへるこよひかも
或本云
右歌或曰橘部女王或曰笠縫女
王作
奉天皇歌一首遠江守櫻井王
九月之其始雁乃使
ながつきのそのはじめのかりがねの
念心者可聞来処鴨
おもふこころはきこえきぬやも

賜(タマフ)報和御歌一首

天皇

大乃浦之其長濱介縁流浪
おおのうらのそのながはまにえよする波
寛公乎念此日
ゆたくきみをおもふこのころ

大浦者遠江國之海濱名也

賜(タマフ)贈大伴宿祢家持歌一首

笠女郎

屋戸乃曜麥之
やどのくれむぎの
吾見
わがみこしほどに
花許毛君波有
はなばかりにもきみはありこせぬかも

贈(タマフ)大伴宿祢家持歌一首

山口女王

秋芽子乎
あきはぎを
置有露乃風吹而
おけるつゆのかぜふきて
落涙者留不勝都手毛
おつるなみだはとどめかねつも

賜(タマフ)娘子歌一首

湯原王

玉乎貫
たまをぬき
不令消賜良牟秋芽子乃
けたずたまへらむあきはぎの
宇禮和和良葉尓置有白露
うれわわらばにおけるしらつゆ

至(イタル)姑坂上(ノ)郎女(カ)竹田庄(ニ)作歌一首

大伴宿祢家持 慶哉師
道者雖遠遣使応来
妹平相見尓出而曽吾来之

和歌一首 天平十一年己卯八月作之

荒玉之月立 大伴坂上郎女
九月右二首 不益者
要西見作 思曽吾歎思

一首 巫部麻蘇娘子
吾屋前乃芽子 花咲有見来益
今二日許 有者将落

奥妹坂上大嬢歌二首

大伴田村大嬢 坂上大嬢
と姉妹

わがやどの秋の萩咲きにけり
いもにもこにも見せむ児もがも

いもにこそ見せも植ゑめ秋萩の
うつろふ時を留めかねつも

大伴田村大嬢

吾屋戸乃秋之 芽子開 夕影尓
今毛見師香妹之光儀乎

吾屋戸尓 黄変蝦手 毎見
妹乎懸管不忘

贈秋稲蔓於大伴宿禰家持歌一首 往来

天平十一年己卯九月

坂上大嬢

吾之蒔有或作早田之穂立 造有
蔓尓曽見作 師驚波世吾背

わがまきし早田の穂立ち作りあれば
蔓に沿ひ来ぬ秋の風吹く

報贈歌一首　大伴宿禰家持

吾妹児之　業跡造　有秋田
早穂乃　蔓葉乃雖見
不飽可聞

又報脱著身衣贈歌一首

家持

秋風之　寒比日　下者将服
妹之形見　跡可都毛　思努播武

右三首天平十一年己卯秋九月往来

攀非時藤花并萩子黄葉二物贈坂上大嬢歌一首　天平十二年庚辰夏六月往来

大伴宿禰家持

吾屋前之　非時藤之　目頬布
今毛見　牡鹿妹之　咲容平

吾屋前之萩子乃下葉者秋風毛未吹如是曽毛

贈坂上大嬢歌一首并短歌

大伴宿禰家持

物平念者将言為便
叩叩　手携而共出立
妹與吾　庭介雖有
尚更　奈何為便毛
妹与我　居而恋乍
不有者

者 床打 拂 白細 乃袖
ふれ こうちをりい ゑろ〳〵乃袖
指代而 佐寢之夜也 常尓有家類
さゝ〳〵さゝやに常尓ゑる
足日木能 山鳥 許曽婆峯向 尓
乃ひきの山るこうハおもう
嬬問 為 云ふ打 蟬 乃 人有
ゑまいすとうつせみ乃人有
我哉 如何ふ為跡可 一日 一夜毛
わかやまふすらいちにちもよ
離居而 嘆 良 武許己念者
それおくおけきこゝろハ
眽許曽痛 其故 尓 情奈 莫夜登
むねそこゝめそのゆへ心なくやと
高圓 乃 山尓毛野尓毛 打行而
一つゑの山も野尓もうち行て
遊ハれて 徃 扨 花耳 丗穂日手
遊ハれてゆけゝ花のこ
有者 毎見 益而 所思
あれハ毎見ますて所思

奈何為而 忘 物曽 戀 云 物乎
いかゝして忘らん物そ恋とふ物を

又歌

高圓 之 野邊乃 容花 面影 尓
一つゑの野邊乃容花面影尓
所見乍 妹者 不勝 而 常
見つゝ妹ハ不勝而常

贈二安倍女郎一歌一首

大伴宿禰家持

今造 久迩能京 尓 秋夜乃
いまつくる久迩の京尓秋夜乃
長 尓 獨 宿之 苦 尤
なかき尓獨宿之苦尤

従久途京贈留寧樂宅坂上大嬢

歌一首

大伴宿禰家持

足日木乃山邊赤居而秋風之日異比久吹者妹乎之曽念

贈尼歌二首 作者未詳

手毛須麻介殖之草子乃地遥者雖見不飽情

足千根乃母乎波布利弖安久乎麻知

衣手介水渋付左右殖之田中

引板乎曳鳴吾波倍乃栗子曽

ひさかたの雨は降りしく真守有がごとも

尼作上句一令誂大伴宿祢家持續下

句和歌一首 尼

佐保河之水乎塞上而殖之田乎

さかりなれやもせきこりけて

家持

苅薄小屋者作而有跡聞吾為里者

いほりせりとも

冬雜歌

雪歌一首 舍人娘子

大口乃真神之原介零雪者

甚莫零家牟不有國

いこまなふりそ家もあらなくに

乃妹めをもたりとも

苅薄乃小野介置而燎火乃

火氣左可之苦毛

さかりなれやもせきこりけて

尼作上句一令誂大伴宿祢家持續下

句和歌一首 尼

佐保河之水乎塞上而殖之田乎

さかりなれやもせきこりけて

家持

苅薄小屋者作而有跡聞吾為里者

いほりせりとも

冬雜歌

雪歌一首 舍人娘子

大口乃真神之原介零雪者

甚莫零家牟不有國

いこまなふりそ家もあらなくに

御歌一首　太上天皇

波太須珠寸　尾花　逆普　黒木用ヒたる

そゝすゝきおりもおさまる手もて

造有　室者迄萬代

にくれるやとはよろづよまでも

御在左大臣長屋王依保宅肆宴

御製歌一首　天皇　聖武帝

青冊吉　奈良乃山　有　黒木用

うへをみよしのゝ山もある里ゝもて

造有　室者雖居座一不飽

にくれるやことをれことわろねも

冬日見雪憶京歌一首

大宰帥大伴卿

泳雪　保杼呂　零　敷者

平城京師可圖

梅歌一首　大宰帥大伴卿

吾缶盛　開有梅　花

遺有雪斗乱鶴鴨

雪梅歌一首　角朝臣廣辨

沫雪尓所落用有梅花
あえ雪尓まかへてそこさくる梅乃花
君之許遣者與曽倍盛半可開
きそうへやりてましよろしも

雪歌一首　安倍朝臣奥道

棚霧合雪毛零奴可梅花
しるしなきまてにちりぬる梅のもの
爾之代余曽倍而谷将見
さくねかうへまそうくしふらん

雪歌一首　若櫻部朝臣君足

天霧之雪毛零奴可灼然
あまきりの雪ももりぬるいちしろく
此五柴尓零来平将見
このいつ柴尓ふりきたれりみまくをほりん

梅歌一首　三野連石守

引攀而折者可落梅花
ひきよちをりてはちらしつへき梅もの

柚木古寸津深者雖不深
柚もこきいれつへし深からすとも

雪歌一首　巨勢朝臣宿奈麻呂

吾屋戸之冬木乃上尓零雪平
わかやとのふゆきのうへにふるゆきを
梅花香常打見都流香毛
うめのはなかとうちみつるかも

雪歌一首　小治田朝臣東麻呂

庭上玉乃今夜之雪尓率歌泊名
にはたまの今夜の雪にいさぬれてな
将開朝尓消者惜家牟
ひらけむあしたに消なは惜けむ

雪歌一首　忌部首黒麻呂

梅花枝分可散登見左右二
うめの花枝わかちちるとみるまてに
風尓乱而雪首落来類
かせにみたれて雪もふりくる

わかやこ乃みまの
梅ハ切ふるくて花咲ハ
冬木花雪ふりかゝりし
ねもころこゝろの
ぬれ衣ハぬれぎぬなんや
知らんハ知りけんと
うめ乃花枝なる
心得し
しらすにもあは雪
雪梅乃哥なるへしけ
梅乃花はやくも咲て咲あまたに見ゆるを称とも何やしそこゝめて
十二月にハ雪ふる物としらねはもあらしとハ雪ふる物をとこゝろ
らいふ心なるへし流かめすしてとハふり心を付へし
冬ふりし雪にきほひてさくハ祇園雪よりきほひくいはゆるの也
東只むも咲へつ梅の
ふゆの雪に競ひてとた

1648

梅歌一首　紀少鹿女郎（ノヲシカノ）
しはすにハあは雪ふるとしらねかも
十二月尓者沫雪零跡不知可毛
うめ乃はなさくふゝめらすして
梅花開含不有而

1649

雪梅歌一首　大伴宿祢家持
けふふりし雪にきほひて我やとの
今日零之雪尓競而我屋戸之
冬木乃うめハ花さきにけり
冬木梅者花開二家里

御在（テ）西池邊（ノホトリニ）肆宴歌一首

御在西池邊　續日本
紀十三曰天平十年七月
曉頭御西池宮ニ云々
いけのへ乃松の末葉ふ
いけハ西池をいふと
何かすいけすさへもある
へかれハふるくなる〳〵五
百重ふりしけと
あは雪乃日なかり
日ならめハ日をあまたて
ひと日もかゝしつきて
いつまても雪のふる
きに梅散るらんと
うめの花折りとも折をも
折ても見かれても
見つきをし

1650

いけのへ乃松のすゑにふるゆきハ
池邊乃松之末葉尓零雪者
伊ほへふりしけあすさへも見ん
五百重零敷明日左倍母将見
天皇御製或本云右一首作者未詳但竪子阿倍朝臣虫麻呂傳誦之

1651

一首　大伴坂上郎女
あは雪乃日ならめにふりきそれかれも
沫雪乃比日續而如此落者
うめ乃花ちりかすきなん
梅始花散香過南

1652

梅歌一首　池田廣津娘子
うめのはな折りも折らすも見つれとも
梅花折毛不折毛見都礼杼母
こよひ乃花にをなほしかすかり
今夜能花尓尚不如家利

いまれこと心をけねは
あさいろふくあをやむるとやしし
先さくはいまふいはをいひ和今の心の
こくく常よりてして三
すいたゞ咲花の
把かつるいろくし
さいかのあしとも
松りけりあさちの
けすきとくる事
いまきりもとり
類聚万葉ことなり
ちまとしまりかり仙兵ハ
いいりもまさ和ゝ
ふるかすのゝ

依梅(テニヲハ)發思(ヲ)歌一首

縣犬養娘子(アガタヰヌカヒノ)

如今 心 平常尓念有者
先咲 花 乃地尓 将落八方
まさくそものつちふれたちめやも

雪歌一首 大伴坂上郎女

松影 乃 殘茅 之 上尓 白雪 平
松りけりあさちのうへの雪を
不一令消 将置 言乍 者可聞 奈 吉
けすくをんことをもあさ

冬相聞

一首 三國真人人足

高山之 菅 葉之 努藝 零雪之
ふるやまれすのそ吉のさ 跡雪

序ふ 立の吉けく
てゆくふの
ゝしものもゆ字
しきけくのけもゆ字
字しば今ゝ祖ふ
くりて へ
さうまかうめの花
のチてハ酒ふ
けるこゝもゆ
泊ゝ奉ゝ時京中同
里ふも酒ハ官乃禁制
あり親吉き一二人
のむるハゆふ
ふ板ふ上ふふ後
飲ふのわハ梅ふ

消 跡可 曰(イヒテ)毛(モ) 戀 乃繁 鶏鳴
けぬとふりもこゝしかきけく

一首 大伴坂上郎女

酒 坏尓 梅 花浮
さうもたにうめのはなうけてふかも
飲 而後 者落 去 登母與之
のチくのちハちりぬともよし

和歌一首 作者未詳

官 尓毛 縦 賜 有今夜 耳
けるきふもものるこゝしのみ
将飲 酒 可毛 散 許須奈由米
のまんさけもちりこすなゆめ

酒者官禁制(ハ)(ノ)(ヲ)京中閭里(ニ)不得(ニ)
集宴(スルヿ)但親(シ)親一二飲樂(ニ)聽許者(ヘ)
縁(テ)此(ニ)和人(スル)作(レル)(ニ)
此發句也

奉レ天皇御歌一首

藤皇后

吾背児與二有見麻世波幾許香
わりせことしてるとこ二ありてそのりくとこ

此雫雪之懽有麻思
まやこのうつくしもと

このゆきのうつくしもよ

一首

池田廣津娘子

真木乃於尓雫遣有雪乃敷布毛
いくん祖尓しきくくこそ

まきのうへにしらゆきのしきしもの

所レ思可聞佐夜更吾背
ハいかゆるうしさよふわりせ

おもほゆるかもさよふけわが

一首

大伴宿祢駿河麻呂

梅花今落冬風音耳
うめの花いまちるふゆの音のみ

聞之吾妹乎見良久志吉裳
きくわぎもをみらくしよしも

久しくれ月をはる今
祇日月待梅柳
いつるをまつやなぎ心もむ

感心開而吾念有公
感心開けてこハ大ふう

うれしみ思ひ開けわが思へる君

一首

紀少鹿女郎

久方乃月夜平清美梅花
ひさかたの月よをきよみ梅の花

心開而吾念有公
心開けてわが思へる君

與妹坂上大娘歌一首

大伴田村大娘

沫雪之可消物乎至今
あわゆきのけぬものをいまもて

流経有妹尓相嶋
ながらへありいもにあふしま

おもかげにいもをしおもへば

一首

大伴宿祢家持

あそゆきの庭

かやうの雪のふりつもりたらんこそ

をかしからめ

沫雪乃庭介零敷寒夜乎

あと雪乃かそかにつもりさえわたるよは

手枕不纏一香聞将宿

ましものを降りすさびつつもとめん

萬葉集巻第八

天和三年二月三日註解此一巻同十五日終功於新玉津嶋之菴下

此一巻従貞享二年九月十八日到十月朔日終再稿之功